

教室と日本をつなぐ Skype Communication の実践と成果

クレムソン大学 岸本俊子

Toshiko Kishimoto, Clemson University

1. はじめに

1995年より実施している CLIP プログラム (Clemson Language Immersion Program) は、夏の5週間、毎日7時間総計200時間を日本語漬けにして、参加者の日本語運用能力を高めるよう開発された夏期日本語集中講座である。参加学生は(1) 秋学期から日本での留学またはインターンシップが内定しており日本語能力を高めたい(2) 夏の間に関単位を取得して卒業を早めたい(3) 時間にゆとりのある夏に日本語を集中して勉強したい(4) 短期留学で獲得した日本語能力を更に伸ばしたい、と様々な履修理由をあげている。学生の要望を満たすためコミュニケーション重視のアクティビティを実施して成果を上げているが、その中でも学生を夢中にさせたハイテク・アクティビティ、**Skype Communication** の実践と成果について報告したい。

2. 先行事例

外国語学習者とネイティブスピーカーとの遠距離インターアクティブ活動は様々なかたちで実施されてきた。

1) 個人対個人

古くはペンパルとしての手紙交換があるが、インターネットが普及した昨今はIT版ペンパルのE-MAIL交換がある。またチャット機能を使って知り合った学生同士が瞬時に交信するケースも増えてきている。学校や国際交流団体が仲介して始まる活動ではあるが、個人レベルで双方の自主性にまかされるケースが多いため教育効果については分からない。

2) 授業活動の一部として

ハワイ大学とハバフォード大学の共同による日本の高校生との文化プロジェクト「町づくり」、中京大学英語科教師によるホームページを利用した日米文化ディスカッションフォーラム、コロラド大学日本語科と早稲田大学英語科のブログを利用した日米ディスカッション等が効果を上げていると報告されている。

今回紹介するクレムソン大学の**Skype Communication**は、音声プラス画像付きの活動であることが先行事例と大きくちがう。また形式のうえでも(1)と(2)の混合スタイルで、学校の授業の一環としてのプロジェクトでありながらボランティアである個人とのコミュニケーションという形をとっているところに特徴がある。

3. SKYPEについて

SKYPE とはルクセンブルグの SKYPE TECHNOLOGY 社の無料ソフトで KaZaA の共同開発者であるニコラス・センストロムとヤヌス・フリスが開発したいわゆるインターネット電話である。日本では2004年10月にライブドアが、2005年1月にバッファローが提携して普及した。誰でも簡単にダウンロードすることができ、スカイプユーザー同士なら無制限に無料音声通信ができるという最大の特徴のほか、比較的低速な回線でも高音質で安定した通話が確保できるのが特徴で世界的にも広く使用されている。2005年時点で400万人のユーザーが登録され内7%がアメリカ合衆国、4.3%が日本でヨーロッパが46%を占めている。カメラ内蔵のパソコンでなくてもウェブカメラを取り付ければテレビ電話、Video Conference も可能であり、また最大5人まで（バージョンによっては10人まで）の電話会議機能があるためビジネスでの利用範囲も広い。日本語教育で使用する場合にはチャット機能を併用することによって聴解力の低い学生には文字による通信で音声を補足することができるという利点がある。

4. SKYPE COMMUNICATION 実施目的

次に CLIP（夏期集中講座）における Skype Communication の目的について述べ、ACTFL Standards 5C と比較した上で語学教育活動としての意義を裏付けたい。

1) 日本人と直接に話す機会を持つ。

これはまさに ACTFL 5C の Communication（英語以外の言語でコミュニケーションを行う）にあたる。米国南東部の大学町では 学生が日本人と接触する機会は、日本語教師と一部の留学生をのぞいては全くないのが現状である。習った日本語を実際に使う機会を日本語夏期集中講座だからこそ与えたいものである。

2) 日本文化について理解を深める。

ACTFL 5C の Culture（自分の文化以外の文化と知識を身につけ理解する）に当たる活動である。CLIP で学習した日本文化事項に関してスカイプパートナーに質問したり確認したりすることで日本文化への理解を更に深めることができる。ことに日本の大学生活、就職活動また若い人の日常生活等は会話が弾む話題である。

3) 習った日本語を駆使して情報を集める経験をさせる。

これは ACTFL 5C の Connection（外国語以外の教科と関連づけ外国語を使って必要な情報を得る）にあたらう。日常の会話を超えて日本語を使って必要な情報を得ることは高度な日本語活動である。文化レポートの資料としてスカイプパートナーの意見を聞く等課題を与えた。

4) 日米文化の相違について考え日本側の意見を聞く。

ACTFL 5C の Comparison（言語と文化の性質について洞察を深める）にあたる。

CLIP のアクティビティの一つに日本映画とリメイク版アメリカ映画を比較して日米文化の相違についてのディスカッションをするが、スカイプパートナーに直接日本的なものの考え方や意見を聞くため日米文化を比較することができる。

5) アメリカの教室にしながら、日本社会に飛び込む疑似体験をする。ACTFL 5C の Community (国内国外の他言語コミュニティの活動に参加する) もどきの体験をするといえよう。ウェブカメラを使っているため相手の様子が手に取るように分かり、あたかも日本にいるような体験をすることができる。

6) 一日7時間の Immersion Program に変化をつける。直接日本と繋がることは新鮮な経験であり、CLIP の授業、活動内容等が話題になるため復習の機会にもなる。何はともあれ長い授業時間に外部の空気を入れて気分を一新させる新鮮な時間となる。

7) 学習活動の基礎となる「自信」をつける。会話力には個人差があるものだが、相手の顔を見ながら話すためそれぞれの学生がレベルに応じて「話すことが出来た」という達成感と満足感を持つことが出来る。これは以後の学習活動に弾みを与え、学習効果が倍増される。

5. 実践概要

1) 期間

Skype Communication は CLIP の一部として実施されたため、まず CLIP についての概要をのべなければならない。夏期講座に位置づけられている Clemson Language Immersion Program は一日7時間（午前8時半から午後3時半まで）、5週間に渡る集中講座である。週末にもアクティビティを組むため総計210時間の日本語漬けコースである。参加資格は日本語200レベルを修了したか、もしくは同等のレベルのある者。2007年度の参加者は9名、学部生8名、大学院生1名で、内留学予定者3名であった。担当教師1名、アシスタント2名で CLIP を運営し、Skype Communication としては日本人パートナー9名、補欠要員3名をボランティアとして依頼した。CLIP の期間は5週間であったが、Skype Communication は一日おきに実施し全10回のセッションを3週間にわたって行った。

2) 事前準備

a. ハード面

参加者に受講前に各自のノートパソコンに Skype をダウンロードし、即使用できる状態で授業初日に臨むよう連絡した。また教室内での騒音をふせぐため全員に

ヘッドフォンを用意させた。ただしウェブカメラはある程度質の高いモデルを使用させたいため、外国語学科で購入し貸し出す型をとった。

b. ソフト面

最も時間を費やしたのが日本側から協力してくれるスカイプパートナーの確保である。受講学生数以上の人に依頼し、パソコンの不具合や先方の都合でその日は相手が出来ないといった緊急事態に対応できる補欠要員を決めておいた。授業の一環として実施する以上、一回たりとも交信できないという事態は避けなければならないからである。

3) スカイプパートナー（日本側協力者）の条件

a. コンピュータ環境が整っていること

まず自宅に自由に使えるコンピュータがあり、自分で操作できる人でなければならない。E-mailの普及とともにコンピュータには慣れていても、自分で自由に使えるかとなると問題が多く、時間的にゆとりのある中高年者を候補者リストから外さなければならなかった。またコンピュータはなるべく新しい型であることが望ましい。これは実施してみて音声や画面がひどく乱れる時は先方のパソコンに問題があることが多かったからである。また相手の顔が見えることが原則なのでパソコンにカメラが内蔵されているか、ウェブカメラを用意してもらえることが条件になった。学生同様、事前にスカイプをダウンロードしてもらった。

b. スカイプパートナーとして望まれる人

まず **Skype Communication** の趣旨に賛同してくれること。推薦された候補者に丁寧な依頼状を送り御願ひした。そして海外情報に興味のある人で外国語学習に理解のある人、つまり何らかの形で外国語学習に努力した経験のある人は忍耐強くスカイプパートナーとしては最適である。そして当然のことながら知っていても英語を話さず根気よく日本語だけで会話を続けてくれる人でなければならない。また日本との時差の関係上、午後10時に在宅しており、且つその時間にパソコンへのアクセスができる人でなければならない。若い人の生活パターン、そして住宅が都心から離れている傾向もあって、これはかなり難しい条件であった。活動の主体が文化情報をとるということであり教材として映画を使ったため、指定した日本映画とリメイク版アメリカ映画を見たことがあるか、または見る予定のある人が条件となった。

c. スカイプパートナー日本側協力者一覧表より

スカイプパートナー日本側協力者を一覧表にして見ると、協力者の傾向がはっきりと現れていることが分かる。

1) 年齢は20代が中心であった。学生6名、若い社会人4名、主婦2名である。

2) 12名中9名が海外在住の経験があった。海外に住んだことはなくとも旅行者として渡航経験がある者3名で、全員が外国語習得にはかなり関心があり、また簡単でないことを体験している者ばかりであった。

3) クレムソン大学への交換留学生在が2名含まれている。一人は留学を終えた者、もう一人は秋学期の留学が決まっているものである。交換留学を終えて帰国している者には比較的日本語の力の低い者、これから留学して来る者には上級レベルの学生をパートナーとした。大学の様子が分かっているのので的確な話題を選んでいた。新しい留學生には大学情報を与えることで上級レベルの学生はさらに会話力に磨きをかけたようだった。

4) 女性が圧倒的に多かったのは担当教師とアシスタントが女性でその関係者に依頼したからであろうか。男性をスカウトする工夫が今後の課題となろう。

5) 注目すべきはスカイプパートナーの居住地である。北は仙台から南は沖縄までと広域に渡っている。インターネットの威力が示され、世界のどこにいても交信できるということが分かる。

スカイプパートナー協力者一覧表（2007年度）

	氏名	性別	年齢	職業	海外在住経験	地域
1	MY	F	26	アルバイト	有	東京
2	EH	F	22	学生	有	沖縄
3	YK	F	23	会社員	有	千葉
4	KH	F	25	会社員	有	広島
5	NT	F	20	学生	CU 交換留學生	福井
6	SF	F	20	学生	無（海外旅行有）	東京
7	SS	F	32	主婦	有	東京
8	MT	F	50	主婦	有	兵庫
9	MK	F	20	学生	無（海外旅行有）	東京
10	HI	M	21	学生	CU 交換留學生	仙台
11	CK	F	25	会社員	有	東京
12	YF	F	18	高校生	無（海外旅行有）	東京

6. スカイプセッション

1) 時間

週3回（月水金）計10回、東部時間午前9時（日本時間午後10時）より実施した。一回にかける時間は当初15分であったが、時間がもつかどうかという心配をよそに、学生側からの要望に答えて30分まで延長した。

2) 前作業と後作業

単なる自由会話ではなく、授業の一環として行う限り教育的効果が現れるよう枠組みを設定しなければならない。学生には前作業と後作業を義務付け内容を報告させた。

a. 前作業

学生はスカイプパートナーにスカイプする前日、つまり日曜日、火曜日、木曜日にメールで会話内容を予告しなければならない。はじめの2回は相互理解目的の会話と設定して、自己紹介、大学生生活等の話し易い話題を選んだ。3回目から10回目までは内容重視の会話とし、CLIPプログラムの諸活動、週末のアトラクタ旅行の報告であったり、文化ペーパーの内容に関する質問であったりした。パートナーも内容に応じて答えを準備できるほか、学生の質問の意味が誤解することなく理解でき、会話を途中で頓挫させずにすむ効果がある。しかし、前作業することの最大の効果は学生が「話す」ことに関して、自分の考えをよくしぼり相手に伝わるよう努力することにある。焦点をしぼって話そうとすることで話す力と共に、思考力を上げさせる意図がある。担当教師はbccで同じメールが送信されるため、スカイプセッションの質を管理することが出来る。

b. 後作業

スカイプセッションが終わると、後作業としてスカイプ日記（レポート）を提出させた。学生は毎回話した内容を報告し、またその内容について考えたことを書くよう指導した。学生にとっては書く作業は時間がかかるものであるが、強制することで書く力を伸ばし、スカイプ会話の内容にも気を配るようになった。宿題で書かせていたレポートではあるが、リズムにのってくるとスカイプセッション終了とともに書き始め、昼休みには仕上げる者もでてきた。会話が目的のセッションであったが、考えをまえとめて書くスキルも伸ばすことができた。

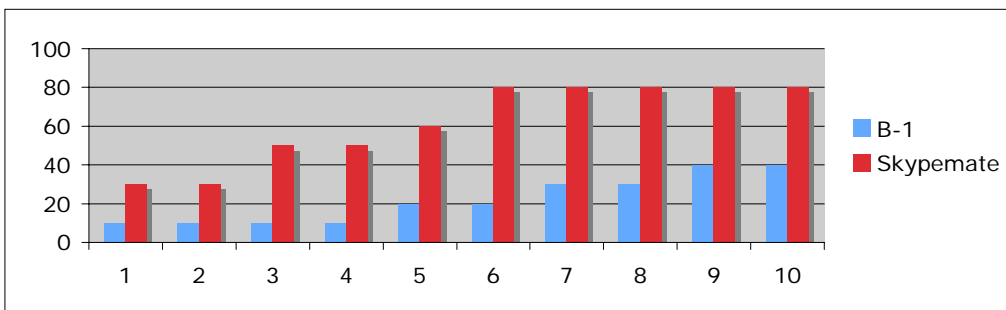
7. Skype Communication 会話理解度

学生とスカイプパートナーには毎回会話の内容がどのくらい理解できたかを記録してもらった。その結果からスカイプセッションの成果を考察したい。前述のとおり CLIP には9名の参加者があったが、100レベル修了で特別に許可された者2名、200レベル修了者4名、300レベル修了者3名であった。それぞれのレベルから全回同じパートナーと話すことができた学生を一名ずつ選び表にした。

a. 100レベル修了学生の場合

この学生は前半の4回はほとんど先方の言うことを理解していなかったと言える。但し日本人パートナーの方が回を増すごとに勘が磨かれ3回目あたりからは理解度が50%になり6回目からは80%とほとんど学生の話すことが分かっている。すると会話もはずみ、日本人パートナーにリードされて話しているうちに学生も40%理解できるようになっている。しかし自己申告で40%ということは実際にはそれより低い率であろう。100レベルしか履修していないということは文法事項のみならず語彙数もすくなく、会話をする上でかなりのハンディがあることが分かる。チャット機能を併用して会話を続けていた。

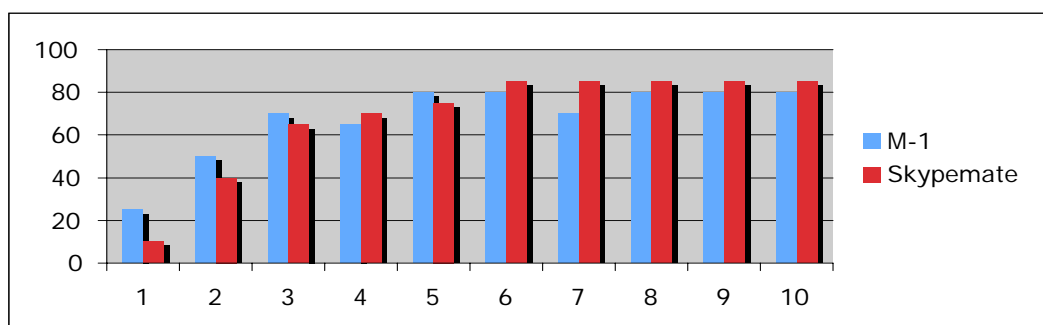
会話内容理解度（表1） 100レベル修了学生の場合



b. 200レベル修了学生の場合

この学生もはじめの2回は低調であったが、3回目あたりから70%まで伸び以降80%は分かったと報告している。このケースで注目すべきは、はじめの3回の理解度が日本人パートナーを上回っていることである。ネイティブスピーカーのパートナーより理解度が上ということは何を示しているのであろうか。学生の性格によるところ、またケースが一例だけであるという前提で述べると、ここに典型的な初級後半または中級の学習者の陥り易い罠が潜んでいることが分かる。つまりある程度外国語を理解しはじめると、実際は分かっていないのに分かったと思込んでしまう誤解である。この学生の場合、はじめの3回は日本人パートナーを凌ぎ、以後もパートナーよりわずかに低い80%の高い理解度を申告しておりその危険性を暗示している。しかし、この学生なりに理解度を伸ばしている背景には200レベルまで学習していると基礎知識も豊富になり会話セッションの回を重ねるごとに効果が現れていることが伺われる。

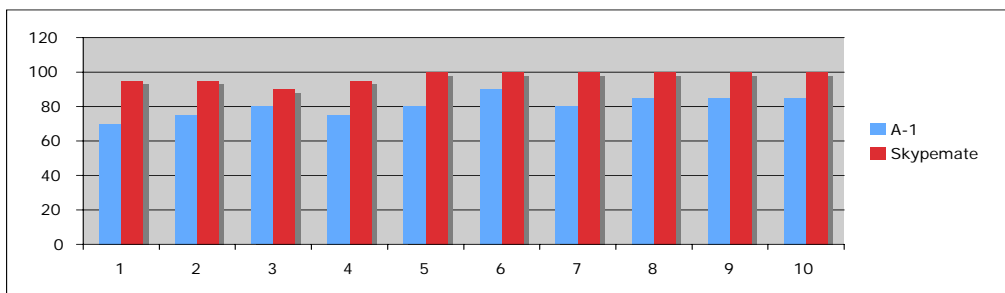
会話内容理解度(表2) 200レベル修了学生の場合



c. 300レベルの学生の場合

この学生の場合、最初から会話上の問題は少なく日本人パートナーははじめから90%以上の理解度を示し、5回目からは100%理解できたと報告している。それに反して学生サイドは非常に慎重である。初回の65%から緩やかにのびし、最高が5回目の95%で後は80%前後を行き来している。自分が分かっていないことが分かるという高度なレベルに達していることが分かる。会話内容の予告e-mailを脇に置き、メモを取りながら話している姿が印象的であった。

会話内容理解度（表3）300レベル修了学生の場合



8. Skype Communication自己評価

学生はこの **Skype Communication** を通して4技能（聞く、話す、読む、書く）についてどのような自己評価をくださったのであろうか。5段階による自己評価の結果を表にした。Bは100レベル修了者、Iは200レベル修了者、Aは300レベル修了者である。5段階の内容は（5）とてもよく伸びた、（4）よく伸びた、

（3）伸びた、（2）あまり伸びなかった、（1）全然伸びなかったである。

レベル別による顕著な違いはなく、それぞれのレベルで同じような傾向が見られている。

a. 聞く力

9名中5名が「よく伸びた」、3名が「伸びた」と答えた **Skype Communication** が聞く力を伸ばすのに絶大な効果を発揮していることが分かる一方、I-1が「あまり伸びなかった」と答えた。これは先方のコンピュータ問題で音声聞き取りにくく、チャットにたよる所が多かったためと思われる。

b. 話す力

IレベルとAレベルの3名が「よく伸びた」とし、5名が「伸びた」と答えた。Bレベルの1名が「とてもよく伸びた」と答えた。この学生の飛躍的は話す力の伸びはクラス全員が認めるところで、Bレベルのもう一人が「伸びた」しているところをみると話す力には個人差があることが分かる。

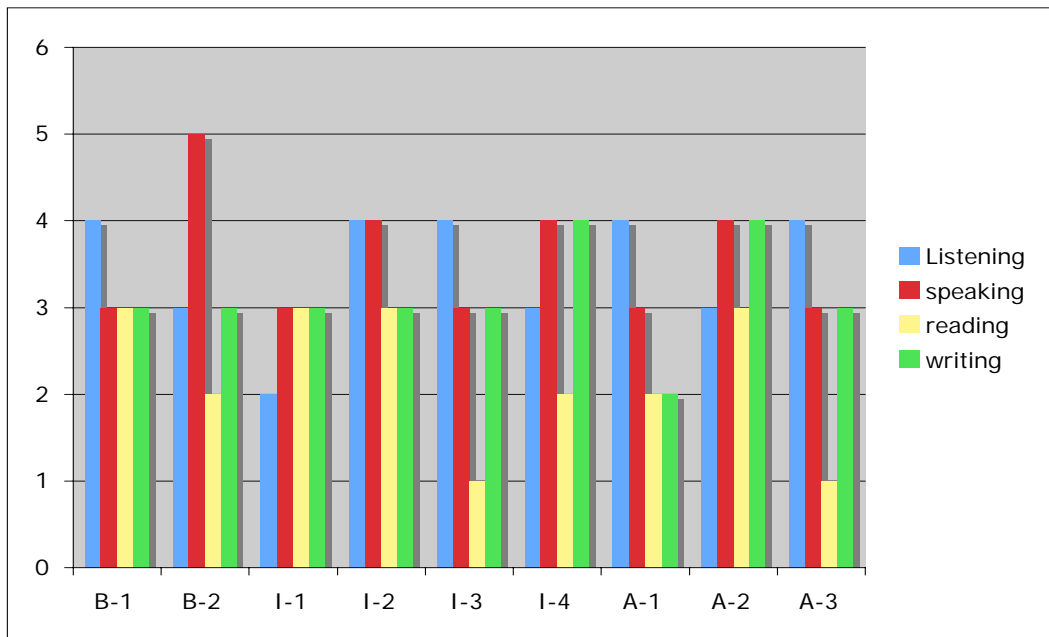
c. 読む力

Skype Communication における読みは先方からメールを読むことである。従ってパートナーがどのくらい分かりやすく、頻繁に返事を書いてくれたかによるところが多い。4名が「伸びた」、3名が「伸びなかった」そして「全然伸びなかった」とした者が2名いた。他の技能に比べて低調である。

d. 書く力

前作業の e-mail、後作業のスカイプ日記を加えたためこの Skype Communication が単なる会話練習にとどまらず、書く力を伸ばしたことをこの結果が示している。書くのが苦手な A-1 をのぞいて6名が「伸びた」、2名が「よく伸びた」と自己評価している。

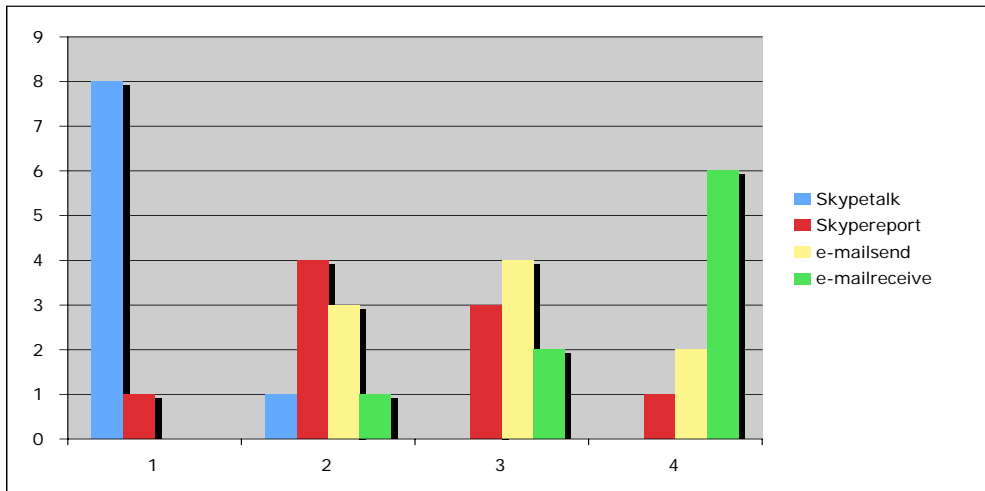
Skype Communication 後の日本語能力自己評価（表4）



Skype Communication 人気アクティビティの調査ではスカイプトークを8名が第1位にあげ、学生がスカイプパートナーとの会話を楽しみ、同時に聞く力、話す力をのびたと満足していることがわかる。スカイプレポート（日記）、e-mail

を出すに関しては双方とも書く力で2位または3位にあげている。E-mailを受信するにかんしては順位が低く6名が最下位の置いた。スカイプセッション自己評価で読む力が低かったことと関連している。

Skype communication 人気アクティビティ (表5)



9. Skype Communicationの成功に貢献したもの

学生に **Skype Communication** で役にたったものは何かとアンケート調査したところ結果は下記の通りであった。

a. 電子辞書

学生は何らかの辞書を傍らにおいて **Skype Communication** をしていたが、ことに電子辞書のスピードは効率的で必須アイテムとなっていた。

b. チャット機能

これは音声に不具合の多い場合のみならず、聞き取り能力の低い学生には強力な助手であり、時には話すより指を動かしていることが多いため巡回して注意をしたほどであった。

c. 予習 (e-mail)

特に上級レベルの学生は書くことに慣れているため、事前に話したい事項を伝えて内容の濃い **Skype Communication** をすることができたと言っていた。能力が高ければ高いほど、運用能力をさらに伸ばしている例である。

d. アシスタント

コンピュータの不具合による音声の乱れ、交信不通などハイテクには様々な予期せぬ問題が起きるものである。まずコンピュータに強いアシスタントがいること。短時間に問題を解決できないと **Skype Communication** の時間が無駄になってしまうからである。また、的確な判断でパートナー代行に連絡をとり **Skype Communication** を続行させる機転も求められた。IT 能力はアシスタントを採用する時には必ず考慮しなければならない条件である。

10. 問題点

1) 時差の問題

日本との交信を考えた場合、時差の問題は大きい。米国東部からは夏は13時間の時差があるため交信時間は東部時間午前9時、日本時間午後10時に限定されてしまう。午後にふさわしいアクティビティなのであるが、朝一番に行わなければならない。効果的な **Skype Communication** のセッションを持つためには、始業時間を早め、学生を会話できる状態にもっていくウォーミングアップの時間が必要となる。

2) コンピュータ機器の不具合

前項で説明した通り、先方のコンピュータまで管理できないため臨機応変に対応できるアシスタントの存在が重要である。

3) 若い日本人の夏のライフスタイル

Skype Communication は10回のセッションをもつのであるが4週にまたがって行われた。この4週間間に学生の場合は就職活動があったり、塾の夜のクラスのアパートがあったり、社会人は旅行等するため、10回続けられる人がすくないのである。代行要員三名は必要であった。

11. より効果的なSkype Communicationに向けて

1) 語彙不足の解決

Skype Communication は日常会話以上の内容のある会話を目的に掲げている。そこで問題になるのが学生の語彙が決定的に不足していることである。前作業に時間をかけた学生が効果を上げていたことから、話す内容を熟考し、e-mailでしらせてからスカイプを徹底させたい。学生の日本語能力に見合った前作業の工夫を研究する必要がある。

2) 話題の提供

Skype Communication はCLIPのような活動の多いプログラムに組み込むと話題を提供しやすい。平常のクラスで応用する場合にはテーマを決めて十分に語彙を増やしたところで **Skype Communication** に入るのが効果的であろう。

3) 個人情報の交換

今回は **Skype Communication** の最初の 2 回をウォーミングアップとして自己紹介等に使ったが、スカイプを始める前に十分な個人情報の交換しておく、話しやすい関係を築くまでの時間を短縮できる。

4) スカイプパートナーの確保

条件にあう人を探すのは至難の業である。日頃のネットワーキングの必要性を実感するわけであるが、理想的なパートナーはやはり同年齢の学生である。一方的に先方の好意に甘えるのではなくやはり **give and take** でお互いに得るところがなければ続かない。そこで過去の交換留学生と、その日本での学友、交換留学予定者が候補者として最適であろう。

12. おわりに

CLIP という日本語教育の中でもコミュニケーションを主体にした夏の集中講座という特殊なプログラムの中で取り入れた **Skype Communication** であったが、その効果は担当教師、学生の想像をはるかに超えた高いものであった。(1) 学生の個々のレベルに合わせた相手がいること、(2) 学生はクラスメートからのピアプレッシャーを受けることなくネイティブスピーカーとの会話に臨み、自分のペースで対応することができたこと、(3) そして個々の活動をチェックする管理が適切に行われていたことが成功の鍵であったと思われる。マルチレベルの学生たちが一様に達成感と満足感を味わい、それがコース全体への学習意欲を盛り上げ、日本語学習への動機づけを高めて **CLIP** 自体を成功に導いたといっても過言ではない。今後、実施方法の更なる工夫で平常授業の課外活動として実施することは可能であると思われる。

最後に学生の感想をひとこと英語であらわしてもらった。

Improving
Beneficial
Rewarding
Enjoyable
Surprising
A great experience
Awesome

満足した学生の声が聞こえてくる。

参考文献

- 1) 溝口博之 (1995) インターアクション体験を通じた日本語・日本事情教育
日本語教育 p. 114-125
- 2) Shimizu, Hideko (2007) Learning Culture and Society through Films with
Technology ACTFL/NCJLT presentation
- 3) 岸本俊子 (2007) フィルムを通して日本文化を考える
ACTFL/NCJLT presentation
- 4) National Standards in Foreign Language Education (ACTFL, Inc)

